

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0272000324		
法人名	社会福祉法人徳寿福祉会		
事業所名	社会福祉法人徳寿福祉会 陽だまりの家ひまわり		
所在地	〒039-3332 青森県東津軽郡平内町清水川字権十郎新田8		
自己評価作成日	令和4年10月31日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	公益社団法人青森県老人福祉協会		
所在地	〒030-0822 青森県青森市中央3丁目20番30号 県民福祉プラザ3階		
訪問調査日	令和4年11月18日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>・令和2、3、4年度と新型コロナウイルス感染症により、近隣地域における各種行事が取りやめが続いている。その状況下でも、入居者のQOLを維持できるように、コロナ禍でも出来る事柄を職員間で相談し合い模索しながら実施している。</p> <p>①天候等を考慮しながら、園庭散歩、施設内に設置してある中庭を活用し、家族面会と音楽をかけながら中庭カフェを実施し、入居者が気分転換を図れるように努め支援している。</p> <p>②少人数でドライブを兼ねてスーパーへ行き、食材の購入とできるだけ希望の商品を購入できるように努め支援し、気分転換を図れるように生活の質を維持できるように対応している。</p> <p>③入浴について…一般浴と機械浴(ミスト浴)を設置している。自立に近い入居者は、一般浴で入浴し、身体状況が低下している方は、ミスト浴で対応している。身体状況に合わせて入浴支援を行っている。</p> <p>④着取り対応について…医療ニーズが低い入居者さんに対しては、最後の最後まで経口摂取できるように食事形態の変更と福祉用具を活用し、できるだけ摂取してもらうように対応しています。</p> <p>⑤各居室へは、見守り支援センサーを設置し、プライバシー保護のため訪室回数軽減を図り、万が一に事故が発生した場合でも今後の対応へと繋げる事ができている。</p> <p>⑥家族向けに2ヶ月に1回、入居者さんの様子を個人事に新聞を発行しお伝えする事で家族から楽しみにしていますとの声が届いている。</p>
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点・工夫点(評価機関記入)】

<p>コロナ禍においても近隣の保育園や小学校との交流や地域のイベントへの参加等、できる限り地域との交流を図れるよう努めている。内部研修等での支援の振り返りや、社内SNSを活用した職員会議の実施などにより働きやすい職場づくりを行っている。ミスト浴導入や見守りセンサー導入による入居者のプライバシーの確保など、日々のケアの向上に繋がる取り組みを行っている。</p>
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開設当初から、事業所独自の理念を大切にし、守り続けている。	事業所の基本理念は、共有スペース等職員が目につきやすい場所に掲示され、毎朝行われるミーティングの際に理念に沿った支援が行われているか、振り返っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	職員は、地域の町内会や小学校、保育園などで開催される行事がある際には、地域の方と連絡を取り合い、積極的に連携を図っている。しかし、コロナ禍により約2～3年は、ほとんどの行事が中止の状況が続いている。今後も新型コロナウイルス感染状況を考慮しながら地域との交流やつながりを持てるように調整していく。	地域の小学校の学習発表会への参加をはじめ、地域のコミュニティセンターで開催される敬老会の参加や地域のふるさと交流会への作品出展、保育園との関わり等コロナ禍ではあるが、できる限り地域との交流が継続できるよう努めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の町内役員や民生委員とは、運営推進会議の時間を活用して相談を受け、対応について話し合いを行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	感染症の流行を考慮しながら2か月に1回運営推進会議を開催し、毎回課題を掲げ活発な意見交換を行っている。その中で様々な意見を頂きサービスの向上へと活かせるように努めている。	地域で感染拡大傾向にある場合には、書面で開催されている。行政職員、町内会長、民生委員が出席し、活動の報告や情報交換が行われている。会議の内容は会議録を回覧して職員間で共有し、サービスの向上に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	2か月に1度開催される運営推進会議へは、行政も出席し、アドバイスをもらいながら協力関係を築いている。また、対応が難しい内容等、相談支援の協力関係を築くことができている。	運営推進会議の他に地域ケア会議等にも参加し連携が図られている。また、制度の情報や困難な事例の対応にもアドバイスを頂く等の協力関係が構築されている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	全ての職員が、身体拘束はいけないうという認識を持ち、束縛しない自由な生活ができるよう支援している。また、職場内で身体拘束についての勉強会も開催しケアに取り組んでいる。	見守りセンサーを活用し、訪室・巡回の回数を減らすことで安全かつプライバシーの保護に努めている。職員の資質向上の為、年間の研修プログラムに勉強会が組み込まれており、身体拘束についての振り返りが行われている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	日々、ケアに当たる際には、小さな傷や内出血等を見過ごすことなく全身観察を行っている。また、発見した時には、原因を探り報告書へ記載、情報を共有し、家族面会時に報告するなど常に虐待を意識し業務を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職場内の勉強会で、権利擁護について学ぶ機会を設けている。また、令和2年10月まで社会協議福祉会の日常生活自立支援事業を活用している入居者もいたが、現在はいない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際には、質問を促しながら行い、質問点に答えている。改定等の際にも同様に行っている。契約解除の際は、十分説明をした上で、次のサービスへと繋げ理解を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	契約時の説明以外にも、毎月請求書を送付する際には、苦情窓口の案内も行っている。また、家族面会時は、入居者とのコミュニケーションを大切に、気軽に話せる雰囲気作り、信頼関係作りに努めている。意見や要望があった際には、対応策を検討し、その後の経過等も家族へ伝えている。	定期受診の報告の際に要望や意見を聞いており、日々の支援に繋げている。また、コロナ禍の現在でも地域の感染状況を踏まえ、予約制や時間制限を設け面会を行うなど、家族の意見を吸い上げる場を設けており、出された意見や要望は職員間で共有し、運営に反映させている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月、リーダー会議、職員会議の中で意見交換を行っている。また、それ以外に職員から出た意見は、主任が管理者へ報告し反映させることができている。	系列の事業所職員が会するリーダー会議や事業所職員で開催される職員会議で日々の支援内容や環境等意見を吸上げている。また、社内用のSNSを活用し、対面ではなくオンライン上で会議を開催するなど、職員の参加率向上や職員のプライベートにも配慮している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は、職員個々人との面談の機会を設定し、努力や実績及び要望等の把握に努めている。目標や研修・勉強会への参加などにより向上心を高める取り組みを行っている。優良な勤務実績・能力のある職員に対し、待遇面で評価することを行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	定期的に職場内で勉強会や外部の研修会に参加する機会を確保している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	関係団体をはじめとする各種の外部研修に参加し、他施設と意見交換や交流を行い、サービスの質の向上に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初期の相談の段階で、本人から想いを引き出せるような会話を心がけ、想いを汲み、安心できるような話しかけ、対応に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の話に傾聴し、想いを汲み取り、不安感を軽減、解消できるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族からの希望や心配事などを聞き取り確認し、対応可能なサービスを提案し、可能な範囲で提供できるように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日々の生活の中で、家事作業など出来ることを最大限発揮できるよう支援している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族へは、日頃から対応についての相談や話し合いを行い支援している。本人にとってより良いケアができるよう相談支援を行っている。時には、家族へケアの部分で協力を頂きながら共に支える関係を構築することができている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	昨年度に続き、今年度もコロナ感染症の影響から、馴染みの人に会う機会や地域で開催される催しが数多く中止となっている。外出機会が減少している中でも、本人が大切にしてきた事柄に少しでも応えられるように、地域でも限られた行事に参加したり、ドライブを兼ねて外出する機会を作り支援に努めている。	地域で開催される交流会への参加やボランティアの受入れ等、地域との関係継続に努める他に、定期受診の際には、家族の同行や親戚との面会など、感染対策を講じながら支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個々に気が合いそうな利用者同士で、共通の話題や趣味に合わせ、座る場所を変えるなど工夫した支援に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居後も家族と行き会う機会が多く、その時には声をかけてどうしているかの状態を聞くよう心がけている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	会話の中から利用者のニーズを引き出し、希望に添えるような対応に努めている。	日々の会話の中から意向を把握するよう努めている。意思疎通が困難な方の意向の把握については、家族からの助言や情報を基に判断している。表情等で理解する研修も行われ、コミュニケーション技術の向上が図られている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時にアセスメントを実施し、全職員で情報を共有し把握している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個々の心身状態や有する能力等、日々の生活の状況を観察し、情報を共有しながら把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々の生活を観察し、モニタリングは3ヶ月に1回実施。6ヶ月に1回担当者会議を開催。家族意向確認の機会を基本1年に1回実施。また、状態変化に応じて、その都度担当者会議を開催しプラン作成に反映するように努めている。	面会時や受診報告の際、家族の意見や直接支援する職員の意見等が反映され、介護計画が作成されている。また、定期的なモニタリングで振り返りが行われ介護計画に反映されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別に施設サービス計画書に沿った記録を取ることで、実施状況や内容が把握でき、介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	いつでも居室や宿直室が空いている時には、ショートステイ、緊急ショートステイとして利用できる体制を整えている。また、地域の認知症の相談窓口として活用してもらえるように外部新聞を2ヶ月に1回発行し地域へ呼びかけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域での学校や町内会、民生員、地域の方々との交流の機会を設けていたが、コロナ禍により地域の方々との触れ合う機会が困難な状況に有る。唯一、地域で開催される町民文化祭には参加し、地域の方々との触れ合う機会、関係性維持に努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	内科は、協力医療機関を勧めているが、強制ではなく、本人や家族の希望にできるだけ応えるように支援している。その他の受診に関しては、在宅時の受診を継続できるように支援している。	契約時にかかりつけ医の確認が行われ、かかりつけ医の受診継続に努めている。受診支援は、基本事業所側で対応し、必要に応じて家族の同行を依頼している。	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	往診に来て頂いている協力医療機関の看護師へ、毎日バイタルサインを電話報告とFAX送信で伝えている。必要時には、その都度連絡をして指示を仰ぐなど協働することができている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した際には、病院を訪問し地域医療福祉連携室、相談員と情報交換を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ターミナル期を迎える前に、事前に家族や本人の意思確認を行い、早期に医療機関や家族、事業所と話し合いの場を設け、ここでできることを明確に伝え情報を共有しながらチームで支援している。その後は、職員間で対応を検討・情報を共有しながらケアを行っている。	契約時に指針を基に説明が行われ、書面にて事前確認が行われている。状態の変化や医療頻度が高くなった際は、都度意向の確認が行われ、チームで支援に取り組まれている。また、看取りマニュアルを整備しているほか、看取った際には職員間で振り返り、課題や成果を共有し支援の向上に活かしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的に勉強会を開催し、入居者の急変時や事故発生に備えている。全職員が定期的に模擬AEDを使い、救命に関する知識を復習し、新しい知識を学び知覚できるようにしている。施設内に緊急時対応マニュアルを掲示している。状態の不安定な入居者に関しては、職員間での情報の共有を行い、急変時の対応ができるように努めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的地震や火災、津波警報が発令されたという想定で避難訓練に力を入れている。また、運営推進会議の中でも災害時を想定し、入居者を避難させるために協力を得られるよう緊急連絡網を作成するなど相互協力の体制を整えている。	定期的夜間の火災や地震を想定された訓練が実施されている他に、併設のデイサービスセンターとの合同訓練や消火訓練も行われている。非常食も3日分備蓄されており、二次災害用の非常用発電機も準備されている。災害時等の事業継続計画について研修を行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者に対しては、一人一人が尊厳を保ち生活できるよう支援している。理念の元、身内のように接してはいるが、人生の先輩であり、お客様であるという意識を常に持ち、失礼が無いように接するよう努めている。	見守りセンサーを全室に完備し、訪室回数を減らすことで入居者のプライバシー確保に努めている。入居者への接遇に関しては、内部研修にて日々の支援の中での声掛けの仕方を振り返るなど、学びの場が設けられている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	行事への参加・外出・入浴等、無理強いはず、本人の意思確認を行い任せるようにしている。施設内・外でも自己決定ができる場面を多く持つように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者一人一人のペースを把握し、その人のペースで生活できるよう支援している。常に本人がどうしたいのかを聞き取りし、確認しながらケアを行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人が好む服の色や機能性などを把握して、家族に準備してもらったり購入等の支援を行っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は、職員も入居者と同じものを摂る。食事を楽しみにしている方が多く、入居者の誕生会には、一人一人の好みを確認し希望通りに提供できるように努めている。また、片付けも一日を通して誰かしら役割として手伝うなど協力して行っている。	入居者の希望を伺ったり、TVや新聞広告からの情報を反映するなど、旬の食材使うことを意識した献立が立てられている。また、地域の方から頂いたり、敷地内の畑で収穫した野菜も使用している。食事以外でも中庭でのお茶会やスイカ割も行われ、季節ごとに食を楽しめる工夫がされている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事・水分チェック表を活用し一人一人の摂取量を把握している。入居者に応じ、好みの飲み物やトロミ剤を使用したり個別に対応している。水分は、毎日個々の摂取量を把握して1500cc程度摂取できるように取り組んでいる。栄養面では、摂取量や栄養バランスが偏らないようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後のうがい、義歯のお手入れを行っている。見守りや介助が必要な入居者には、それぞれ支援している。就寝前には、必ず義歯を外してもらい毎日洗浄剤に浸けて清潔を保持できるように支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	可能な限りトイレで排泄できるよう、排泄チェック表を活用し、入居者の排泄リズムに合わせたトイレ誘導や声かけを実施している。また、排泄状況に合わせ排泄用品を変更し対応している。	排泄チェック表を用いて、個々の排泄パターンを把握し、職員間で共有している。それらの情報を活かして、個々の習慣や体調に合わせた排泄支援が提供されている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘が予防できるよう適切な水分摂取量の確保と、起床後に水分を提供したりと取り組んでいる。また、食前体操、定期的にアクティビティの日を設定し身体を動かす時間を提供するよう務めている。下剤の種類も主治医へ相談しながら本人に合った服用方法を探り対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた支援をしている	入浴は、週2回入れるように調整しているが、本人から入りたい時間や順番等の要望があった場合には、対応できるよう努めている。また、一般浴では入浴剤を入れ、香りや色も楽しめるよう配慮している。ミスト浴と一般浴が有り、状態に応じて入浴支援に努めている。	入浴は週2回実施されており、入居者個々の状態に合わせて一般浴槽とミスト浴で対応している。入浴のない日は清拭対応等清潔面にも留意した支援が行われている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	入居者一人一人の生活習慣を把握し、環境調整を図り休息や安眠ができるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居者一人一人の薬を全職員が把握し、主治医の指示通り服用できるよう支援している。処方に変更や副作用などについての留意点の指示があった時には全職員が把握し観察できるよう支援している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	食器拭き、洗濯物を干す・たたみなどの役割があり、それぞれに意欲を持ち進んで行うことができている。また、在宅時からの趣味や嗜好品を楽しんで継続できるように努め支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	コロナ禍でも出来る事を模索し、戸外に出かけられるよう努め支援している。天気の良い日には、外に出て散歩をしたり、中庭で音楽を聞きながらカフェを開いて気分転換できるように支援している。1週間に1回程度、個別にドライブを兼ねてスーパーへ外出している。	コロナ禍でも感染対策を行い、週1回程度外出している。天気のいい日は、中庭にルーフテントを張りアイスクリームを食したり、お茶会が行われている。また、敷地内の花壇や畑の生育状況を確認しながら散歩も行われている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居者や家族の希望により、金銭を持つことで安心して過ごせるよう支援している。外出した際には、能力に合わせた支払い方法を工夫するなど支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	入居時には、予め家族から電話をかけることへの了解を得て、希望があった場合は電話をかけることができるよう配慮している。また、家族から電話があった場合には、子機へ繋ぎ居室でゆっくりと会話できるよう配慮している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	生活空間は、一般住宅と変わらない設備を心がけている。特に共用の空間は、入居者一人ひとりの要望に応じ、心地よく過ごせるよう物音・室温等に配慮している。また、季節感を感じ取れるよう共用空間や居室内へ季節に合った装飾を施している。	共有スペースには、キッチンもあり食事を作る様子を伺う事ができる。小上がりに畳のスペースもあり、一人ひとりが心地よく過ごせる環境を整えている。また、季節を感じさせる作品も掲示されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	入居者間は馴染みの関係ができており、食堂でくつろいで過ごしていることが多い。少しの時間横になりたいと思った時には、小上がり(畳のスペース)で休んだり、一人になりたい時には居室で過ごせるよう配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時には本人、家族と相談しながらテレビを設置したり、使い慣れたものや装飾品などを自由に持ち込んでもらい殺風景なお部屋にならないように、快適に過ごせるよう空間作りに努めている。	各居室には、蓄熱ヒーターとベッドが備え付けられており暑い時期は移動用クーラー等で過ごしやすい環境を提供している。契約時には、馴染みの物を持ち込んでいただくよう説明がされ、TV等思い思いの物を持ち込まれている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設内は全てバリアフリーとなっている。至る所に手すりが設置され安全に移動できるようになっている。また、トイレの扉は居室とは異なる配色で目印になっている。		